

「早期肝癌と類似病変の病理」

久留米大学教授・病理学第1講座 神代 正道 著

兵庫医科大学教授・第1外科

岡 本 英 三

ここ数十年の間に、各種画像診断器機が急速に進歩・普及し、臨床的に発見される肝癌あるいはその類似病変のサイズはどんどん小さくなってきた。日本肝癌取扱い規約では、最大径2 cm以下の単発肝癌を細小肝癌と規定しているが、臨床の現場では1 cm前後の微小な結節性病変も画像上診断可能の時代である。しかしそれらの生検や切除材料の病理組織学的診断となると、病理診断医の間でも意見が分かれることが往々にしてあり、臨床医を困惑させることも少なくないのが実情である。このような時期に「早期肝癌と類似病変の病理」が上梓されたことは誠に時宜を得たと言うべきであり、正に待望の書の出現とも言える。

著者の神代正道教授は、肝癌および門亢症の病理学で一時代を築かれた中島敏郎名誉教授の高弟であり、病理学教室の後継者でもある。恩師の下で培われた剖検材料による肝癌の病理学を土台として、神代教授は早くから外科切除材料を用いた生体の肝癌病理の必要性に着目され、特に胃癌や大腸癌と同列に論じられるような早期肝癌像の解明に精力的に取り組んで来られた。その卓越した研究成果と見識で肝臓学会、肝癌研究会などで常に指導的役割を担って来られた。本書はその集大成と言うべきものである。

全編200頁余のうち3/4が早期肝癌の病理に、残り1/4が類似病変に割かれている。多数のカラー写真はマクロ、ミクロともすべて厳選され

たものが用いられている。

序において、著者は「早期肝癌の定義は未だ確立されたものがなく、また議論もあるので、本書では病理学的定義を離れ、単に臨床的に早期の段階にあるとの観点から早期肝癌という呼称をあえて用いた」と断っているが、本文の中では現時点における早期肝癌の病理学的定義をはっきりと打ち出している。すなわち「細小肝癌のうち背景の肝構築を大きく破壊することなく、非膨張性に増殖している高分化癌は肉眼的には境界不明瞭であり、その多くは腫瘍径1.0~1.5 cm前後で、現時点で臨床的に捉えうる最小の肝癌で、病理学的にもca. in situに相当する早期肝癌と考えて差し支えはない」との明確な見解を述べており、このコンセプトが全編を通じて一貫している。「細小肝癌、境界不明瞭型」が早期肝癌の病理形態の特徴を表しているとのこの考えは著者が早くから指摘されるところであり、肝癌取扱い規約第3版(1992)に細小肝癌の亜分類として既に取り入れられている。本書を読めば著者の意図されるところが改めてよく理解できる。早期肝癌の基本をなすのは高分化型肝癌であり、その組織学的特徴については6項目に分けて特に詳細に記述されている。その上で早期肝癌の脱分化と増殖、血管構築の特徴、多中心性発生、更に早期肝癌の背景病変といった純病理学的事項について論述が展開しているが、われわれ臨床医にも極めて理解しやすい。

また本書の大きな特徴は臨床との関連が特に詳しく述べられている点で、これこそ生体の肝癌病理の真骨頂と言える。すなわち超音波誘導下肝生検診断の頂では結局高分化肝癌組織の認識が早期診断のポイントであるとの観点から、切除材料との対比に基づいて演繹的に解説されており、著者の長年の経験が余すところなく発揮されている。早期肝癌の病理形態と超音波像、早期肝癌のエタノール注入療法による形態変化の項は病理学書としてはユニークであり、臨床に貴重なものがある。

早期肝癌の類似病変では日常臨床で遭遇する腫瘍性・非腫瘍性病変のほとんどすべてを網羅し、かつ要点を簡潔に記述されている。特に最近画像診断上注目されてきた結節性過形成病変についてはかなりのスペースを割いて病理学的問題点についてわかりやすく解説されている。この領域は病理学者の間でもかなり意見の相違と混乱の少なくないところであり、概念の整理に役立つであろう。

本書は正に早期肝癌と銘打った成書としては日本はおろか世界的にも最初のものであり、単なる解説書ではなく、著者の生々しい主張を述べた点でも極めてユニークな病理学書である。病理学者にとっても臨床家にとっても、貴重な座右の書として推薦したい。

● B5 頁238 図9 写真16
原色図240 1996 定価(本体13,000円+税) 7400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)